

## ASEAN 諸国の国際収支の発展段階

経済調査部 副部長 中村 明  
[akira\\_nakamura@iima.or.jp](mailto:akira_nakamura@iima.or.jp)

### はじめに

一国の経常収支は、①財貨・サービスの輸出入の差額（貿易・サービス収支）、②対外債権・債務に関わる利子・配当の受け払い（第一次所得収支）、および③居住者と非居住者との間の対価を伴わない資産の提供に係る収支（第二次所得収支）<sup>1</sup>から成る。

経常収支の赤字国は、その赤字額に相当する資金を海外からの投資や融資に依存するため、経常赤字の持続は対外純債務の増加につながり、仮に経済の規模に対して対外純債務の残高が過大になれば、債務が返済不能となる可能性が生じる。経常赤字が拡大を続けた国のうち、とくに経済の発展段階が低い途上国では、懸念を抱いた海外の投資家や資金の貸し手による債権回収により、実際に債務不履行となるよりも前に資金が海外へ流出する事態が過去に多くみられた。結果として、これらの国々は、通貨の大幅な下落や流動性の不足から経済が混乱に陥った。

以上の理由により、一国の通貨や経済の先行きを展望するうえで、経常収支の動向は常に注視する必要がある。このように目を配るべき経常収支の中長期的な姿を考える際に、参考になるのが国際収支の発展段階説である。以下では、日本にとって関わりの深い東南アジア諸国連合（ASEAN）諸国の経常収支の動向を、本仮説をもとに考察してみたい。

### 1. IS バランスと国際収支の発展段階説

国際収支の発展段階説は、国際収支の推移を中長期的な視点から説明する仮説である。一国の経常収支が、国内の貯蓄（S）と投資（I）の差（IS バランス）に相当することを基礎として、経済発展に応じ国内の IS バランスが変化し、それに合わせて経常収支とその裏側にある金融収支が変化するという考え方である。

<sup>1</sup> 官民の無償資金協力や外国人労働者の郷里送金など。

この仮説によれば、一国の経済は図表 1 のとおり、(1) 未成熟の債務国、(2) 成熟した債務国、(3) 債務返済国、(4) 未成熟の債権国、(5) 成熟した債権国、(6) 債権取り崩し国という 6 つの発展段階をたどり、各発展段階に応じた国際収支構造があるとされる。

図表 1：国際収支の発展段階と各収支項目

	貿易・サービス 収支	所得収支	経常収支	金融収支	ISバランス
(1) 未成熟の債務国	－	－	――	――	$I > S$
(2) 成熟した債務国	＋	――	－	－	$I > S$
(3) 債務返済国	＋＋	－	＋	＋	$I < S$
(4) 未成熟の債権国	＋	＋	＋＋	＋＋	$I < S$
(5) 成熟した債権国	－	＋＋	＋	＋	$I < S$
(6) 債権取り崩し国	――	＋	－	－	$I > S$

(注) 経常勘定においては＋は黒字を、－は赤字を示し、金融勘定においては＋は自国による対外資産の取得超過（資金の純流出）を、－は外国による対内資産の取得超過（資金の純流入）を示す。

(資料) 秦忠夫、本田敬吉、西村陽造著（2012年）「国際金融のしくみ 第4版」有斐閣アルマなどより作成。

これは、経済が資本蓄積の深化とそれに伴う工業生産力の高まりにより発展し、次第に工業生産力が低下していくことを前提としたものと考えられ、通常は工業輸出立国に当てはまるとされる。米国や英国をはじめ日本もこうした過程をたどったとみられる一方で、本仮説を適用しにくい国も多数存在する。各段階の詳細は以下のとおりである。

#### (1) 未成熟の債務国

経済発展の初期で国内の貯蓄が不十分な段階。投資に用いる資金を海外からの資本流入に依存するので、対外債務が増加し所得収支は赤字となる。また、産業が未発展なため貿易・サービス収支も赤字となり、経常収支は赤字である。

#### (2) 成熟した債務国

経済・産業の発展に伴い輸出が拡大し、貿易・サービス収支が黒字に転じる。ただし、累積した対外債務の支払いによる所得収支の赤字が、貿易・サービス収支の黒字を上回り、経常収支は依然赤字の状態にある。

### (3) 債務返済国

産業基盤の拡大により輸出の増加が顕著となるため、貿易・サービス収支の黒字が拡大する。この段階では、まだ純債務国の状態にあるため所得収支は赤字だが、貿易・サービス収支の黒字が所得収支の赤字を上回り、経常収支は黒字化する。経常黒字を反映して国内の投資資金が海外の資産へ向かい、金融収支は黒字となる。

### (4) 未成熟の債権国

経常黒字の持続により金融収支の黒字が続き、対外資産の取得が進むと、対外純債権国に転じる。対外債権から受け取る配当・利子が対外債務に対して支払う配当・利子上回るため、所得収支は黒字化する。貿易・サービス収支および所得収支のいずれも黒字の状態、経常黒字が続く。

### (5) 成熟した債権国

経済発展が進み所得水準が上昇すると、労働コストの上昇などから輸出産業の一部が競争力を失うため、貿易・サービス収支が赤字に転じる。ただし、金融収支の黒字の持続により対外純債権は増加しているため、所得収支は黒字で、かつ貿易・サービス収支の赤字を上回り、経常収支は黒字を維持する。

### (6) 債権取り崩し国

貿易・サービス収支の赤字が拡大し、所得収支の黒字を上回るようになると、経常収支は赤字に転じる。金融収支も赤字となるため、対外純資産は減少していく。

## 2. 国際収支の発展段階で ASEAN 諸国の先頭を走るマレーシアとタイ

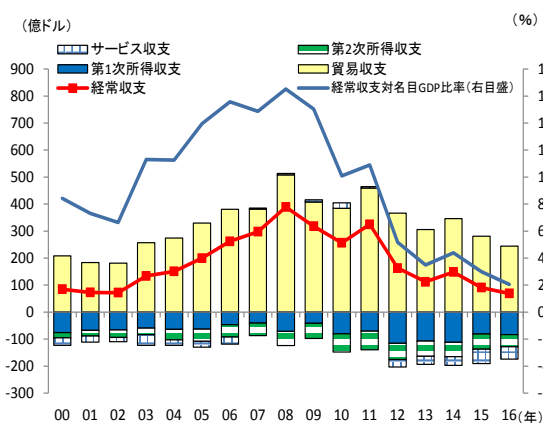
ASEAN 諸国のなかで工業輸出立国に着目すると、国際収支の発展段階が最も進んでいるのは、産業の集積と高度化が進み所得水準が高いマレーシアである（図表 2）。ただし、国際収支の発展段階説は、通常、工業輸出立国に当てはまるとされるため、金融サービスの比率が大きい都市国家のシンガポールと、天然資源への依存が極めて大きい産油国のブルネイを対象から外している。

マレーシアは、貿易・サービス収支の黒字が所得収支の赤字を上回るため、経常収支が黒字であり、また、金融収支はプラス（対外資産の取得超過、資金の純流出）となっている。図表 1 の分類によると、債務返済国に該当すると考えられ、かつ、現在の国際

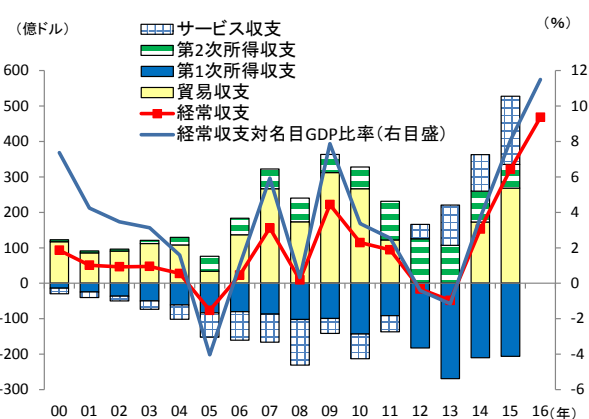
収支の特徴が 1998 年より 20 年近く恒常化してきた。なお、2013 年以降、第一次所得の赤字は縮小傾向をたどっている。

また、タイも、2014 年以降は貿易・サービス収支の黒字が所得収支の赤字を上回り、経常収支が黒字となっているため、債務返済国に位置付けられる。2000 年以降は概ねこうした傾向が続いてきたが、2005 年および 2012 年から 2013 年にかけては、経常収支が貿易黒字の縮小を主因に赤字に転じるなど、マレーシアとは異なり、経常収支は一貫して黒字を維持してはいない（図表 3）。

図表 2：マレーシアの経常収支の推移



図表 3：タイの経常収支の推移

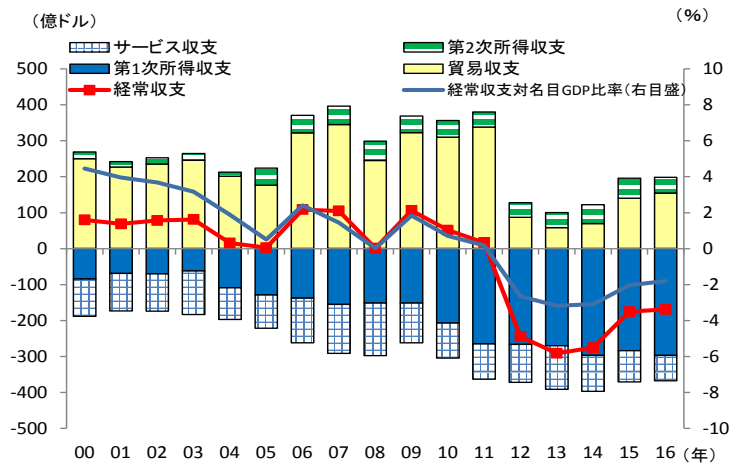


(資料) IMF データより作成

### 3. 「成熟した債務国」に位置するインドネシア

国際収支の発展段階において、マレーシアとタイに次ぐのがインドネシアである。経常収支は、貿易黒字に支えられ小幅ながらも黒字基調で推移してきたが、2009 年を境に黒字が縮小し、2012 年に赤字に転じるとその後 5 年は赤字を続けてきた（図表 4）。貿易・サービス収支は、2000 年以降の 17 年間のうち、2012 年から 2014 年までの 3 年を除いて黒字を維持してきた。一方で、第一次所得収支は、期間を通じて概ね赤字の拡大傾向を続け、2012 年以降は経常赤字の主因となってきた。貿易・サービス収支は概ね黒字であり、第一次所得収支の赤字幅がそれを上回ることから、経常赤字になるという、成熟した債務国の特徴を示している。なお、対外純債務は未だ拡大を続けているため、近い将来、所得収支の赤字が目立って縮小する姿は想定しにくい。

図表 4：インドネシアの経常収支の推移



(資料) IMF データより作成

#### 4. その他の ASEAN 諸国の国際収支の発展段階

以上のマレーシア、タイ、およびインドネシアを含む ASEAN 諸国を、国際収支の発展段階説に基づき可能な範囲で分類すると図表 5 のとおりとなる。なお、フィリピンとベトナムは、対外純債務国であるにもかかわらず、海外への出稼ぎ労働者の本国送金が巨額に達していることなどから、経常収支が黒字となっており本学説になじまないため、シンガポールやブルネイと同様に対象から除いた。

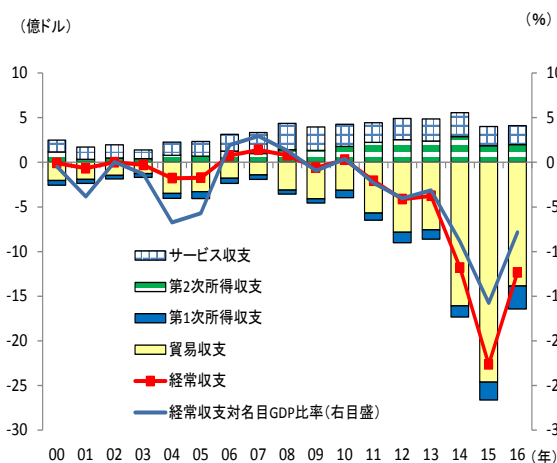
図表 5：ASEAN 各国の経常収支の発展段階

	貿易・サービス収支	所得収支	経常収支	該当国
(1) 未成熟の債務国	—	—	—	ラオス、カンボジア、ミャンマー
(2) 成熟した債務国	+	—	—	インドネシア
(3) 債務返済国	++	—	+	マレーシア、タイ
(4) 未成熟の債権国	+	+	++	該当なし
(5) 成熟した債権国	—	++	+	
(6) 債権取り崩し国	—	+	—	

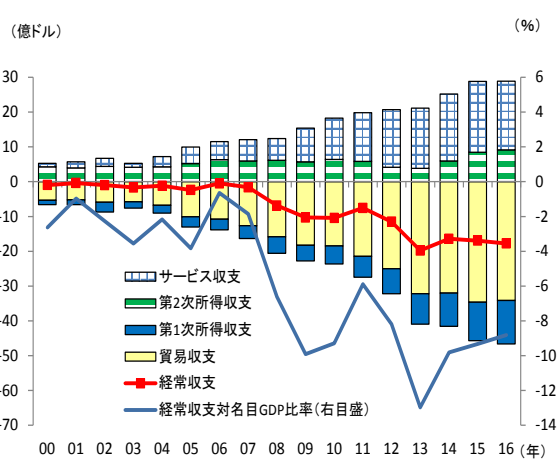
(注) 図表 1 に同じ。

ラオスとカンボジアは、いずれも貿易・サービス収支および第一次所得収支が一貫して赤字基調で推移しているため、経常赤字を続けるという典型的な未成熟の債務国の状態にある (図表 6、図表 7)。

図表 6：ラオスの経常収支の推移



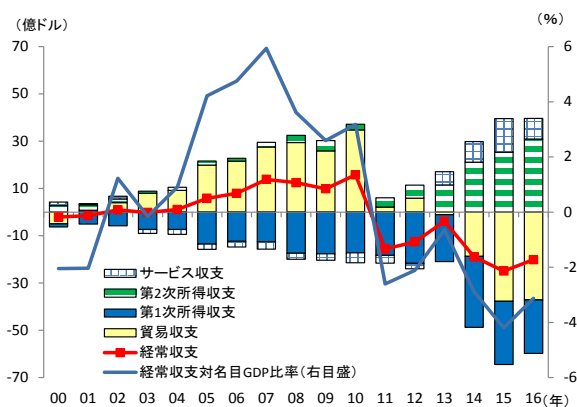
図表 7：カンボジアの経常収支の推移



(資料) IMF データより作成

また、ミャンマーは、2003年から2010年まで貿易黒字を続けていたが、2011年以降は、厳しい規制下に置かれていた輸入が順次自由化されたため、貿易収支は黒字の大幅な縮小を経て赤字に転じ、2015年以降は貿易・サービス収支が赤字に転じた。他方で、第一次所得収支は2000年以降赤字を続けてきたため、足元では経常赤字が定着しつつある。したがって、ラオスやカンボジアと同様に未成熟の債務国に区分される(図表8)。

図表 8：ミャンマーの経常収支の推移

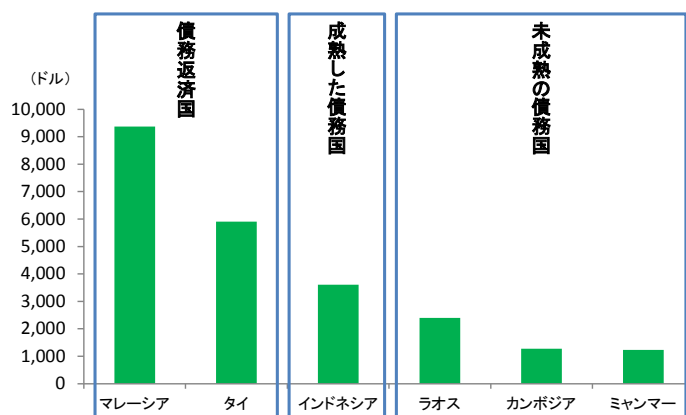


(資料) IMF データより作成

## 5. おわりに

中長期的視点に立つと、経常収支の構造は経済の発展に伴い変化するため、経済が順調に発展を遂げる限り、経常収支は現在の段階から次の段階へ移行する。ASEAN 各国のなかで債務返済国に属するマレーシアとタイは、経済成長が頓挫しなければ将来的に次の段階である未成熟の債権国への移行が予想される（図表 9）。

図表 9：ASEAN6 カ国の一人当たり GDP と国際収支の発展段階



(注) 一人当たり GDP は 2016 年の実績値。一部の国は予測値

(資料) IMF データより作成

また、成熟した債務国に属するインドネシアは債務返済国への移行を、未成熟の債務国に属するラオス、カンボジア、ミャンマーは成熟した債務国への移行を順次目指すこととなろう。

冒頭で述べたとおり、経常収支は、一国の対外債権・債務と密接な関わりを持ち、とくに途上国は、経常赤字の持続が国際資金フローの変調につながる危険があるため、その動向を常に注視すべきである。それとともに、こうした中長期的な健全性の視点から、経常収支の発展段階が経済成長に伴って順当に次の段階へ移行しつつあるか、あるいは、長らく同じ段階にとどまったり、以前の段階に逆戻りしたりする兆候がないか、定期的に確認する必要がある。

以上

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべて御客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2017 Institute for International Monetary Affairs (公益財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: 3-2, Nihombashi Hongokucho 1-chome, Chuo-ku, Tokyo 103-0021, Japan

Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2

電話 : 03-3245-6934 (代) ファックス : 03-3231-5422

e-mail: [admin@iima.or.jp](mailto:admin@iima.or.jp)

URL: <http://www.iima.or.jp>